

ふぞろいな世界線を 振り切って

紫音みけ Shion Mike



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

目次

- プロローグ 不可思議な現象
- 第一章 世界の分岐
- 第二章 タイムリープの可能性
- 第三章 最善の未来
- 第四章 観測者
- エピローグ 私たちの夏

5 ふぞろいな世界線を振り切って

プロローグ 不可思議な現象

セミの声がこだまする、高校一年の七月。

その奇妙な現象は、なんの前触れもなく、私たちの日常に突然入り込んできた。

「あれ。一ノ瀬？」

始業前の教室に足を踏み入れると、そんな声が私を呼びとめた。

見ると、すぐ近くの席に腰掛けた男子が不思議そうな顔をこちらに向いている。

クラスメイトの遠野彼方^{とおのかなた}くんだ。背が高くて、喧嘩が強いという噂がある人。周りの男子たちからは恐れられているため、普段から一人で過ごしていることが多い一匹狼。

そんな彼が、こんな風に私に声をかけてくるなんて珍しい。

けれど何より私が驚いたのは、もっと別のことだった。

「え……遠野くん、どうしてここにいるの？」

思わず、そう聞き返してしまった。

聞かずにはいられなかつた。

だつて遠野くんは昨日、交通事故に遭つて亡くなつたのだ。

彼が今、ここにいるはずはない。

まさか幽靈、それとも幻？ と最初は疑つたけれど、周りのみんなにも遠野くんの姿は見えているらしい。

そして当の彼は私に対し、さらに思いもよらぬことを口にした。

「一ノ瀬こそ、なんでここにいるんだよ。昨日、事故で亡くなつたつて聞いたけど……」

彼の中ではなぜか、私の方が死んだことになつていた。

私と彼との間で、認識の食い違いが起きている。

何か、説明のつかない現象が起こつてゐる。

不可思議で、きっと忘れる事のできない、私たちの夏が幕を開けた。

第一章 世界の分岐

運命の事故が起つてゐるその日、私は海を見ていた。

神戸の南側。瀬戸内海に面した港のそばには、複数の商業施設が集まる観光エリアがある。

海に臨む形で、大観覧車や子ども向けテーマパーク、ショッピングモールなどが建つてゐる。その目と鼻の先には、神戸のシンボルであるポートタワーがそびえる。

夕焼け色に染まつていくその景色を眺めながら、私は一人で潮風に当たつていた。クルーズ船が出入りする波止場を見下ろす形で、ウッドデッキのオープンテラスが広がつてゐる。その端にある段差に腰掛けてぼーっとするのが、私は好きだつた。

昼の暑さも少しずつ和らいで、過ごしやすい時間帯がやつてくる。

けつして静かな場所ではない。さすがは観光スポットというだけあって、この時間になると平日でも人が集まつてくる。特にカップルが多いのは、きっとこれが夜景を眺めるのに適しているからだらう。

この雑踏^{ざとう}が、なんとなく心地よかつた。

静かすぎず、うるさすぎず。適度な雑音は脳の集中力を高める、なんて話も聞くけれど、それに通ずる何かがあるのかもしれない。

だから、心が疲れた時はいつもここに来る。

とりわけ今日は、大事な友達と喧嘩をしたばかりだった。

喧嘩とは言つても、特に言い合いなんかをしたわけじゃない。ただ一方的に、私が避けられているだけだ。

高校のクラスメイトである、天江^{あまえ}ハルカちゃん。

彼女とは今年の春、入学式の日に出会った。出席番号順で並んだ時にお互いが前後だったことから仲良くなり、あの日から夏休みを目前に控えた今日まで、私たち二人は教室でいつも一緒にいた。

それが、今日の夏休みから急に、彼女の態度^{ひょうど}が豹変^{ひょうへん}したのだ。

四時間目の授業が終わって、いつものように二人でお弁当を食べようとすると、彼女は私を無視して別のグループに交ざってしまった。まるで私のことが見えていないかのように、こちらと視線^{しせん}を合わせることは一切なかつた。

彼女は気さくで明るくて、誰とでも仲良くなれる。だから私以外にも仲の良い友達はたくさんいる。私一人を切り捨てたところで、きっと困ることは何もないだろう。

私は何か、彼女の気に障る^{さわ}ようなことをしてしまったのだろうか。

もしさうなら謝りたいのだけれど、何が原因だったのかはわからないし、あの状態の彼女にどう話しかければいいのかもわからない。

口下手で勘も悪い私には、どうすれば彼女と仲直りができるのかが想像できなかつた。

そもそも、地味で存在感の薄い私と、人気者の彼女とでは、最初から釣り合つていなかつたのかもしれない。そう考えると、ここから関係性を修復するのは不可能にも思えてくる。

私はもう一度彼女と仲良くなりたいけれど……もう無理^{むり}かもしれないと思うと、どうすればいいのかわからなくて、なんの行動も起こせなくなつてしまふ。だから、こんな時はいつも、私は手元のスマホに向かつて問い合わせてみる。

「ねえ、ラビ。私、どうしたらいいのかな」

画面の向こうからこちらを見つめているのは、ウサギっぽい見た目をした動物の

キャラクターだった。

白くて丸い体に、細長い耳が生えている。シンプルで可愛らしい顔をしたそのキャラクターは、スマホのマイクを通して私の声を聞き取り、質問に答えてくれる。

「やつほー、真央。どうしたの？」何か困ってるみたいだね。もっと具体的な情報を教えてくれたら、ボクも相談に乗るよ！」

幼い少年のような声。およそ機械音声とは思えないような流暢な日本語で、彼はそう提案してくれる。

スマホ専用のAIアシスタントアプリ『ラビ』。

これはAIが搭載されたキャラクターと会話をすることができますのアプリで、仕事や人間関係の悩みなど、あらゆる面で精神的なサポートをしててくれる。

私が困っている時、相談に乗ってくれるのはいつもこのラビだった。彼は私以外の人間とは話すこともないから、私も彼の前でだけは安心して悩みを打ち明けることができる。

もちろん、毎回必ずしも満足できるような答えが返ってくるわけじゃない。まだまだ人間の心の機微に疎い彼は、時にはひどく無機質な回答をすることがある。

それでも私にとつては、こうして気兼ねなくなんでも相談できる」とがとても心強かつた。
「あのね。今日は、ハルカちゃんと喧嘩しちゃって……喧嘩つていうか、一方的に私が避けられてるだけなんだけど」

AI相手でさえ口下手な私。

けれどラビは、そんな私を嘲笑^{あざわら}つたりはしない。ただじつと耳を澄ませて、こちらの話を真剣に聞いてくれる。だから私も、ついそれに甘えて、じっくり時間をかけながら次の言葉を探していく。

そうやって会話を集中しているうちに、今度は背後から別の人のが届いた。
「ねえ、君。今一人？」

男の人の声だった。

もしかして私に話しかけてる？と思つて、恐る恐る振り返つてみる。
するとそこには、大学生くらいの知らないお兄さんが立っていた。髪の色が明るくて、ちょっとキャラクタのような雰囲気がある。

「えっと、私……ですか？」

こちらが聞き返すと、彼は上機嫌な笑みを浮かべたまま頷く。

「今学校の帰り？ もし時間あるならさ、一緒にご飯とか行かない？」

「え……」

まさかのナンパだった。

こういうのには慣れていない。断らなきや、と思うのに、変に緊張してしまって言葉が出てこない。

「えっと、その、私……」

「あー大丈夫、大丈夫！ 僕、奢るし。お金のこととかは気にしなくていいから」

「あ、いや、その」

そうじゃなくて、と口にすることもできないまま、彼の腕が私の肩に回される。

「ほら行こ。美味しいお店知ってるからさ」

ぐいっと無理やり後ろから押されて、体が勝手に前へと進んでしまう。男の人の力強さと強引さに、確かな恐怖心が芽生える。

どうしよう。どうしよう。

こういう時、なんと言つて断れば相手も諦めてくれるのだろう？

きっとこの人は、私が大人しい性格をしていることを見抜いて声をかけてきたのだ。

私ならきっと断れないから。気の弱そうな相手を選んでナンパをしたのだと思う。

昔からそうだった。私は内気で、頼りなくて、何もできない子、というイメージを周りから持たれている。そんな私が何かを言つたところで、人の心を動かすことなんてできなかつた。

これがお兄ちゃんなら……私と違つて優秀なお兄ちゃんなら、いつどんな発言をしたって、周りの人は耳を傾けてくれるのに。

目の前の男の人は、私の気持ちなんて微塵みじんも興味がないようで、足を止めることなく私をどこかへ連れていく。

——嫌だ。

胸の奥では嫌だと叫んでいるのに、私の口はうまく動いてくれない。

素直な言葉が出てこない。

まるで呪いにでもかかっているかのように、声は喉元で引っかかるてしまう。

——助けて！

私の肩に回されていた手を、別の誰かが強引に引き剥がした。

「わっ！……つと、なんだ？」

男の人はびっくりした様子で、自分の手首を掴んでいる相手の顔を見た。

もちろん私も驚いて、その場に急に現れた人物に目を向ける。

そこにいたのは、見覚えのある男の子だった。私と同じ高校の制服に、短い黒髪。背は高めで、白いワイシャツの袖から伸びる腕には引き締まつた筋肉がついている。

「やめろよ。彼女、嫌がってるだろ！」

冷静な声でそう言つた彼は、私のクラスメイトである遠野彼方くんだった。彼は相手の手首を掴んだまま、キッと鋭い視線を浴びせる。

「な、なんだよあんた。急に出てきて。手、放せって」

ナンパの人はすぐさま遠野くんの手を振り払おうとしたけれど、思いのほか、その手はびくともしないようだつた。遠野くんのあまりの怪力に、彼は「えっ」と戸惑いの声を漏らすと、みるみるうちに困惑した表情を浮かべる。

動搖しているのは、私も同じだつた。

なぜ、遠野くんがここにいるのだろう？

彼も学校の帰りにここへ寄つた、というのは何も珍しいことじやないけれど、まさかこんな場面に居合わせるなんて。

「ちょ……なんなんだよ本当に。もしかして、あんたもこの子狙つてんの？ わかつたわかった。俺は別の子に行くからさ、それでいいだろ!?」

ナンパの人は見るからに焦つた様子でそう訴える。

そういえば、遠野くんの家は空手道場だつて話を聞いたことがある。遠野くん自身も空手をやっていて、喧嘩が強くて怖い人……といふ噂を耳にすることもある。

教室でいつも一人でいる彼は、周りの男子たちから怖がられている印象が強い。もしかしたら本当に喧嘩が強くて、気性きじやうが荒い人なのかもしれない。
もしも今、このまま殴り合いにでもなつてしまつたらどうしよう——と内心ハラハラしていると、彼はまったく予想していなかつたことを口にした。

「彼女に謝れよ。そしたらこの手を放してやる」

私が呆気に取られていると、ナンパの人は心底面倒くさそうな顔でこちらを見て言つた。

もういい加減にしてくれって」

そこでようやく、ナンパの人は遠野くんの手を振り解いた。そのまま私を一瞥するなり、ふんと鼻を鳴らして不機嫌そうにその場を去っていく。

「……あ、あの、遠野くん。ありがとう」

私がぎこちなくお礼を言うと、彼は表情一つ変えることなく、こちらを見下ろして

言った。

「なんでもっとハッキリ拒否しなかったんだ?」

「え?」

「嫌なら断ればいいだろ。こっちが大人しくしてたら、ああいう奴はどんどんつけがるぞ」

彼の言う通りだった。私がなんの抵抗もしなかつたから、あの男の人は都合が良いとばかりに強引に事を進めようとしたのだ。

でも――

「その……どう言えばいいのかわからなくて」

私が何を言つたところで、あの人は引かなかつたかもしれない。弱々しい声で反論

をしたところで、ああいう人はこちらの言葉をねじ伏せてしまつ氣がする。

「そのまま言えばいいだろ。嫌だつて」

「そ、そうちもしれないけど」

遠野くんのようによく迫力がある人や、お兄ちゃんのようなしつかりした人の話なら、きっと誰もが耳を傾けてくれるだろう。

けれど私は、人と会話をするのが下手で、うまく伝えられないから。

親からはよく話し方のことで注意されるし、気の短い人にはあからさまに苛々されたり、話を途中で遮られたりすることもある。

今だつてそうだ。遠野くんに対して、どう説明すれば納得してもらえるのかがわからず、言葉が出てこない。

彼もきっと苛立つている。せつかく助けてくれたのに、これでは恩^{おん}を仇^{あだ}で返してしまつてゐる気がしてくる。

ああ、私はまたこんな体^{いる}たらくだ。

いつもいつも、要領が悪くて、人を落胆させてばかりで。

情けなくて、どんどん惨めな気持ちになつて、つい泣きそうになつてしまつ。

そのまま顔を上げることもできずに黙ってしまった私を見て、遠野くんは一つ大きな溜め息を吐くと、どこか改まったようには声のトーンを下げるで言つた。

「別に責めてるわけじゃないぞ。俺も言い方が悪かった。要するにさ、自分の気持ちはハッキリ伝えた方がいいぞって、そう言いたかったんだ」

そんな彼の言葉は、彼のイメージに反して、纖細な優しさが滲んでいた。

意外に思つて、私は再び顔を上げる。

すると、お互の視線がまっすぐにぶつからって、彼の真剣な瞳から目が離せなくなる。

「一ノ瀬はさ」

と、彼が私の苗字を口にしたので、私はちょっとだけびっくりした。

正直、名前は覚えられてないと思っていた。同じクラスとはいえ、今までお互に話したことは一度もなかつたし、何より、彼はクラスメイトの誰にも興味を持つていないように見えたから。

「一ノ瀬は、いつもブレーキかけてるよな。学校でも、何か言いたそうな時も我慢しているつていうか」

図星だった。同時に、そんなところまで見抜かれていたことに驚く。

他の人からすれば、私はただ何も考えずにボーッとしている人間に見えるはずなのに。「頭の中では、色々考へてるんだろ？」でも結局は何も言わない。そういうの見てるとさ、じれったくなるんだよ。俺はなんでもすぐ言うタイプだし。俺からすれば、なんで素直に言いたいこと言わないんだって、もっとハッキリ気持ちを伝えればいいだろつて、もどかしくなるんだ

彼からそんな風に思われていただなんて、今まで考えもしなかつた。

そもそも私のことなんて眼中にないと思っていた。私は影が薄いタイプだし、その場に居ても居なくとも変わらないような人間だから。

けれど思い返してみれば、遠野くんは周りをよく見ている節が確かにあった。以前、体育の授業中にクラスメイトが熱中症になりかけていた時、その兆候に一番に気づいたのは彼だった。

それには、先生が探し物をしていた時、先生の性格からおおよその場所の見当をつけて見つけ出したのも彼だった。

普段は誰ともつるもうとせず、どことなく近寄りがたい雰囲気を持った一匹狼なのに。その観察眼は優れていて、私みたいな目立たない人間のことなんでもお見通し

だつたりする。

なんだか不思議な人。

掘れば掘るほど新しい顔が見えてきそうな気がして、彼のことをもつと知りたいと思つてしまふ。

「遠野くんつて……」

面白いね、と言いかけて、ハッと口を噤のむ。

いけない。一体何を言い出そうとしてるんだろう、私は。軽率にそんなことを言つて、彼の機嫌を損ねたりでもしたら。

「俺が、なんだつて？」

「あ、ううん。なんでもないの」

「は？ なんでもないわけないだろ。何か言いかけてただろ、今」

「本当になんでもなくて」

慌ててはぐらかそうとする私を、彼は探るような目で見つめてくる。

「また何か我慢しようとしてるだろ。そういうのやめた方がいいぞって、今話したばつかだよな？ なんですかそやつって、自分の気持ちを隠そつとするんだよ」

自分の気持ちを隠したい、わけじゃない。

ただ、私はお兄ちゃんと違つて要領が悪くて、説明も下手だから。不用意に口を開けば相手を苛々させてしまうから。できるだけ黙っていた方がいいのだ。

今までもずっと、そうやって生きてきた。そうするべきだと思つていた。

なのに遠野くんは――

「口に出さなきやわかんないだろ。自分が本当はどうしたいのか、ちゃんとと言え。言葉を考えるのに時間がかかるなら、いくらでも待つてやるから」

そんな予想もしていなかつた彼の言葉に、私の心臓が跳ねる。

いくらでも待つてやる、なんて。そんな風に言われたのは初めてだつた。

だつてほとんどの人は、無駄なことに時間なんて割さきたくないはずだ。口下手な私の話に付き合う時間は、無駄の方が多いはず。だから私はできるだけ、普段は聞き役に徹しているのに。

「別に焦らなくていいし、文法がめちゃくちゃでもいいからさ。今、一ノ瀬が思つてること、全部吐き出してみろよ」

話し方が下手でも気にしなくていいと、彼は言つてくれている。

本当に、いいのだろうか。私の話がどれだけ拙くとも、つまらなくても、彼は最後まで私の言葉を聞いてくれるのだろうか。

「その、私……」

おずおずと私が口を開くと、彼は相変わらず真剣な顔で、こちらの声に耳を澄ませてくれる。

だから私は、思いきって、少しづつ心の内を言葉にしてみた。

「わ、私……人と会話をするのが苦手で、自分の気持ちをどう話せばいいのかわからなくて」

「おう」

「む、無理に話そっとすると、相手に迷惑をかけている気がして、怖くなっちゃつて……」

自分の話をするのが怖かった。

口下手な私が長々と話すことで、相手を不快にさせるかもしれない。退屈な思いをさせるかもしない。実際に、過去にはあからさまに嫌な顔をされたこともあった。

だから、不思議だった。

遠野くんはなぜ、こんな私の話を真剣に聞いてくれるのかと。

「遠野くんは、どうして……そんなに優しくしてくれるの？」

私が改めてそう尋ねた頃には、空には一番星が浮かんでいた。

潮の香りを含んだ風が、遠野くんの短い髪を揺らす。

「別に優しくしてるつもりなんてないけど……ただ、一ノ瀬みたいな奴を見ると、放つておけなくなるんだよ。せっかく色々考えてるくせに、全部自分の中だけで完結させようとする奴。俺の弟も、そんな感じだったから」

弟さん。

そうか、遠野くんはお兄ちゃんなんだ。だからこんなにしっかりしてて、周りが見えるのかもしれない。

「ねえ、真央。そもそも家に帰らなくとも大丈夫？」

と、今度は私の手元から幼い声が上がった。

ずっと握りしめていたスマホ。その画面の向こうから、ラビが私を心配している。

「十九時三十八分の電車に乗らないと、門限に間に合わないよ」

言われて、私はすかさず時刻を確認する。あと十五分ぐらいしかない。急いで駅まで戻らないと電車に乗り遅れてしまう。

「門限か。そりや大変だ。気をつけて帰れよ」

遠野くんはそう言って、わずかに頬を緩めた。
高校生にもなって門限で焦るなんて、と笑われたのかもしれない。遠野くんみたいにしつかりしている人なら、門限なんかなくとも親に心配されたりしないんだろうなと思う。

けれど、彼の私を見る目はどこか優しさが含まれているような気がした。もしかしたら弟さんのことも、いつもこんな風に見守っているのかもしれない。

どちらにせよ、彼の穏やかな表情を初めて見ることができて、私は嬉しかった。できればもう少しだけ話したかったな、なんて。今までの私では考えられなかつたような気持ちが胸の奥から湧き上がりてくる。

彼と一人で過ごした時間。こんなにもたくさん自分のことを話せたのはいつぶりだろうか。

普段は表に出せない心の内を知つてもらえて、すごく特別な時間だった。叶うなら

明日の学校でもまた、彼と話せたらいいなと思つてしまつ。

「じゃあな、一ノ瀬」

「うん。ありがとう、遠野くん」

まるで夢のような、夏の日の夜。

お互に手を振り合つて、私たち別れた。



港の観光エリアのすぐそばにある神戸駅まで走ると、目当ての電車の時間にはなんとか間に合つた。

高架にあるホームまで辿り着いたところで、やつと息を整える。
電車が来るまであと一分。無事に門限までには家に帰れそうで、ほつと胸を撫で下ろす。

と同時に、先ほどの遠野くんとの会話を改めて振り返つた。

『一ノ瀬は、いつもブレーキかけるよな。学校でも、何か言いたそな時も我慢し

てるつていうか』

教室でも、彼は私のことを見ててくれたんだ。

そう思つと、なんだか胸の奥が温かくなる。こんな私でも、ちゃんと感情があつて、一人の人間なんだつて認めてもらえた気がする。

たとえ口下手でも、誰かに伝えたい思いがある。私の話を聞いてほしいつて、本當は思つてゐる。

明日、あの教室で遠野くんに話しかけたら、彼はまた、私の言葉に耳を傾けてくれるのかな……なんて、そんな都合のいいことばかり考えているうちに、目の前のホームに電車が入ってきた。

扉が開いて、私はそこへ足を踏み入れる。

どこに座ろうかと迷つていると、車両の外からは救急車のサイレンが聞こえてきた。なんとなく不安を煽る高い音が、辺りに響く。どうやらかなり近い場所を通つていららしい。さらには複数のパトカーの音も近づいてきた。

なんだか物々しい雰囲気だった。もしかしたら、近くで大きな事故でもあつたのかかもしれない。

やがて出入口の扉が閉まつて、私を乗せた電車は北東へ向かつて動き出した。



「やつと帰つてきたのね、真央」

帰宅してリビングのドアを開けると、明らかに苛立つた様子のお母さんと目が合つた。

「あ、お母さん。ただい……」

「今何時だと思つてるの。遅くなるなら先に連絡してつて、いつも言つてるじゃない」まるでこちらが門限を破つたかのような剣幕。

念のためにスマホで時間を確認してみると、午後七時五十八分だった。

「まだ八時にはなつてないけど……」

門限まではまだ二分ある。そう反論しようとした私の声を遮つて、お母さんは疲れ

たように溜め息を吐く。

「こんなに暗くなるまで遊んでたら危ないでしょ。女の子なんだから。何かあつたん

じゃないかつて、心配になるでしょ」

どうやら門限は関係なく、私が夜まで外出していたことを咎めているらしい。確かにここまでギリギリになることは滅多にないから、本当に不安にさせちゃったのかも。でも、八時って遅いのかな。お兄ちゃんが高校生だった時は、そこまで時間に厳しくなんてなかつたのに。

私は女の子だから……というのもあるのだろうけれど、お母さんがここまで心配するのは、それだけの理由じゃない気がする。

「さつきは港の方まで行つてたんでしょ？　お友達と一緒にいたの？　まさか一人で遊んでたわけじゃないわよね」

私の行動も、こうしてしっかりとチェックされている。スマホにGPSが付いているので、お母さんはいつもそれで私の居場所を監視しているのだ。

さすがに、あの場所に一人でいたなんて言つたらまた怒らせてしまうので、ここは諱魔化しておくことにする。

「う、うん。クラスの子と一緒にいたよ」

一応、嘘じやない。たまたま出会つただけとはいえ、あの場所には遠野くんがいた

のだから。

「遊びたい年頃なのはわかるけど、ほどほどにしなさいよ。夜は変な人も多いんだから。真央は大人しいし、喋るのも下手なんだから、そういう人に声をかけられたら断れないでしょ」

図星すぎて、返す言葉もなかつた。まさにいつさつき強引なナンパに遭つて、もう少しでどこかへ連れていかれるところだった。

私は大人しくて、喋るのも下手だから……こんなだから、お母さんもつい必要以上に世話を焼こうとしてしまうのだろう。

私もお兄ちゃんみたいに、頭の回転が速くて、しっかりと受け答えができるような人間だったらよかつたのにな——と、いつもの自己嫌悪じこけんおに陥つていたところへ、リビングで点けつけなになつて、いたテレビの音が急に耳に入つてきた。

「……ということは、このラビもしばらく使えなくなるということですね」

ラビというワードに、私は反応した。

見ると、液晶の向こうではベテラン風のキャラスターが神妙な面持ちでゲストに語りかけている。画面の右上には大企業の名前とともに『サイバー攻撃か』の文字が

あつた。

「あ。そのニュースね、さつきからずつとやつてゐる。お兄ちゃんの会社、サイバー攻撃を受けてるんだって」

お母さんの言つた通り、話題に上がつてゐるのはお兄ちゃんの勤めている会社だつた。有名なＩＴ企業で、私が使つてゐるラビもそこが開発したアプリだ。

報道によると、この企業が提供してゐる各種サービスはしばらく停止するらしい。試しにスマホでラビを起動してみると、『メンテナンス中』の文字が表示された。

そうか。しばらくラビと話せないんだ。

彼に何も相談できないというのは、ちょっとだけ心細い。

「大変よね。でも、会社にはお兄ちやんがいるから、きっと大丈夫ね」

お兄ちゃんは有能だから、きっとなんとかしてくれる。お母さんはそう信じて疑わない様子だつた。

すでに実家を出て大阪で一人暮らしをしているお兄ちゃんは、私と違つてしまつてゐる。だからお兄ちゃんに對してだけは、お母さんも絶対的な信頼を置いていた。

こういう態度を日にする度、私はまた慘めな気持ちになる。お兄ちゃんが褒められ

る度に、私はダメだと言われてゐるような気がしてしまう。

なんだか息苦しくて、私はさつさと自分の部屋に行こうと足を踏み出した。

テレビの中のキャスターが「速報です」と急に話題を切り替えたのは、その時だつた。

「神戸駅付近で、トラックが歩道に突つ込む事故がありました。二人が軽傷。一人が意識不明の重体です」

神戸駅付近で、事故。

ついさつき、私が通つてきた場所だ。

思わず振り返つて、テレビの画面を凝視する。^{ぎょうし}映つていたのは、ひどく見覚えのある景色だつた。

「あら、事故？ 結構近くじゃない。怖いわねえ」

のんびりと他人事のように言つお母さんと違つて、私は内心穏やかじやなかつた。

嫌な予感がした。

この場所は、さつき私が通つてきた道。近くには遠野くんもいたはずだ。

彼は大丈夫だろうか。まさかとは思うけれど、事故に巻き込まれたりしていしないだ

ろうか。

不安になつて、すかさず手元のスマホに問いかける。
「ねえ、ラビ。このニュースの詳しい情報……」

そこまで言つたところで、ハツとする。

画面には『メンテナンス中』の文字。そういえば今はアプリは使えないんだった。
仕方なく、ネットで検索する。神戸駅付近で起こつた事故。被害の状況。

事故はつい三十分ほど前、午後七時半ごろに起つたようだつた。

そういえば、さつき駅のホームから電車に乗り込んだ時、近くで救急車やパトカーのサイレンが鳴つていた。あれはもしかしたら、その事故の対応だつたのかもしれない。

ネットニュースの記事ではまだ詳しい情報は出でていない。一人が軽傷、一人が意識不明の重体。さつきテレビで言つていた内容と同じだつた。

軽傷の二人はともかく、重体になつてゐる人物のことが気になる。

私はじれつたくなつて、今度はSNSのアプリを開いた。

思つた通り、現場に居合わせた数人が事故後の様子を写真に撮つてアップしていた。

私は目を皿のようにして、それらの投稿を片つ端から確認していく。

すると、ある一つのアカウントの発言が目にとまつた。

【轢かれたのは男子高校生っぽい 制服姿だつた】

その言葉の意味を理解した瞬間、足元が崩れていくような感覚があつた。

事故に遭つたのは男子高校生。

あの時間帯にあそこを歩いていた人物となると、ますます遠野くんのことが心配になつてくる。

と、今度は別のSNSアプリにメッセージが届いた。

学校のクラスで共有している、連絡用のアプリだ。そこに、クラスメイトの一人がメッセージを投稿している。

【遠野が事故に遭つた】

視界に飛び込んできた文字に、思わず呼吸が止まる。

遠野くんが事故に遭つた。

本当に?

危惧していた最悪の事態が、SNS上で共有される。

本当に?

本当に?

【えうそどこで?】

【もしかして今ニュースになつてゐるやつ?】

【神戸駅の近く? 港の辺りか!】

みると、他のクラスメイトたちの発言も流れしていく。

最初に事故の報告をしたのは、向田悠生くんだった。クラスの中でも特に目立つ

タイプの男子で、彼の発言があると周囲もすぐに反応する。

話の流れを見ていると、どうやら向田くんは、事故当時にその現場にいたらしい。

目の前で遠野くんが車にはねられるところを目撃したようだつた。

どうか人違いであつてほしいと思つたけれど、クラスメイトである向田くんの発言となれば、それは難しい願いかもしれない。

意識不明の重体。それつてどういう状態なんだろう。遠野くんは助かるのだろうか。

ついさっきまで、私の話を真剣に聞いてくれていた遠野くん。

あんなに優しい彼が、どうしてこんな目に遭わなければいけないんだろう。

彼にもしものことがあつたら、私は「一体どうしたらいいんだろう」

「ねえ、ラビ。私、どうしたらしいのかな……?」

問いかけても、もちろん返答はなかつた。

私が青い顔をしているのに気づいて、隣からお母さんが「どうしたの。具合でも悪いの? 熱、測る?」と的外れなことを聞いてくる。

テレビのニュースはすでに次の話題に移つて、有名な野球選手のホームランを讀んでいた。キャスターの声も和やかになり、陽気なBGMがかかる。

遠野くんが事故に遭つたことなんて、まるで此細なことなのだと言われているような気がした。

事故発生から時間がだけが刻々と過ぎていく中で、私にできることは何もなかつた。



時計の針が、深夜零時を指そつとした頃。

ネットのニュースで、男子高校生の死亡が発表された。

「……そんな」

信じられない結果に、私の頭は真っ白になる。

遠野くんが亡くなつた。

あんなに強くて優しい彼が。

スマホを持つ手が小刻みに震えて、勝手に涙が溢れてくる。布団にくるまつて、彼と今日話したことと思い出して、私は声を殺して泣いた。

SNS上では、クラスメイトたちが彼の死を悼むメッセージを残していく。それらの一つ一つがまるで遠野くんの死を証明しているかのようで、余計に空しかつた。

「……聞こえますか、真央」

静寂の中で、不意に声が届いた。

少年のよう、あるいは大人の女性のような声。やけに落ち着いていて、それがラビのものであることに私はなかなか気づけなかつた。

「ラビ？ ……そつか、やつと復旧したんだ」

先ほどまでずっとメンテナンス中だつた彼、あるいは彼女。

その口調は、なぜかいつもと違つた。もしかしたらサイバー攻撃の影響で初期化されたのか、もしくは仕様変更があつたのかもしれない。

「あと三十秒で日付が変わります。早く寝ないと、明日に響きますよ」

ラビの言う通りだつた。

明日は平日で学校があるから、寝坊するわけにはいかない。

こんな悲しい事故があつても、日常は続いていく。きっとあの教室では、まるで何事もなかつたかのように授業が始まることだ。

夏休みは明々後日から。うちの学校では終業式の前日まで、さつちり六時間授業のスケジュールが組まれている。

「もし寝付きが悪いのでしたら、睡眠導入音楽を再生します。クラシック音楽、ヒーリング系、自然音、オルゴールなどから選べます。特に希望がなければ、ランダム再生しますが……」

今日のラビはやけに細かいな、と思った。それに、なぜかお母さん並みに私の世話を焼こうとしてくる。

もしかしたら、ラビなりに私のことを心配してくれているのかもしれない。

心配、という言葉が適切なのかどうかはわからないけれど、少なくとも今の私が精神的に疲弊していることは理解してくれるようだつた。

「……ありがとうございます、ラビ」

今日の疲れを明日に持ち越さないために、一刻も早く休息を取りとラビは言う。合理的なそのサポートは、どこか無機質で、理知的な優しさだった。

「どういたしまして。それでは、音楽を再生します」

落ち着いた敬語で淡々と話すラビの声は、以前にも増して機械的な感じがする。どんな状況でも冷静でいられるその様子は、まるでお兄ちゃんみたいだと思つた。



結局、そこから何時間も寝付けなかつた。

けれどいつのまにか泣き疲れて、気がついたら朝を迎えていた。たぶん二時間ぐら

いは眠つたのかな。

スマホで時間を確認すると、午前七時。そろそろ支度(したく)をしないと学校に間に合わなくなる。

ほんやりとする頭で、昨日のことを改めて思い出す。

放課後の夕暮れ、港の辺りで遠野くんと会つて、たくさん話をした。普段の私なら

夢であつてほしかつた。

誰にも打ち明けないような内容まで、彼は嫌な顔一つせずに聞いてくれた。
そしてそのまま後ろに、彼は事故に遭つたのだ。

遠野くんが亡くなつた。

もしかしたら本当に夢だつたんじゃないかと思つて、クラスメイトたちと繋がつて

いるSNSアプリを開こうとすると、「真央。そもそも準備をしないと、学校に遅れますよ」と、スピーカーからラビの声が届いた。

口調が昨日のままだつた。以前のような少年っぽさはなくなつていて、まるで落ち着いた大人の女性のような声色、それも敬語。

その声を耳にした瞬間、昨日のことはやつぱり夢じやなかつたのだと悟つた。

遠野くんはもういない。

事故で亡くなつてしまつた。

今日は、学校で全校集会でも開かれるのだろうか。

全校生徒の前で、先生の口から彼の死を告げられるのかと思うと、その場の空気を想像しただけで、私は耐えられそうになかつた。

重い足を引きずつて、始業時刻ギリギリに教室まで辿り着くと、そこはいつもと変わらない賑やかさで満ちていた。

まるで昨日の事故なんてなかったかのように、見慣れた顔のクラスメイトたちはそれぞれ楽しげに談笑している。

みんな、遠野くんのことなんてどうでもいいのだろうか。

確かに彼は普段から一人でいることが多かつたし、特定の誰かと仲良くしていたイメージもないけれど。それでも、一人のクラスメイトが亡くなつた直後にしては、あまりにも関心がなさすぎるんじゃないのか。そんな憤りにも似た感情を胸の奥でくすぶらせていると、すぐ隣から、声をかけられた。

「あれ。一ノ瀬?」

見ると、入口のそばにある席に腰掛けた男子が、こちらに顔を向けていた。短い黒髪に、意志の強そうな瞳。

「ワイシャツの袖から覗く腕には、引き締まつた筋肉がついている。

どこか余裕のある居住まいから、一見して強者の風格が窺えるその人物――

「……遠野くん?」

彼が、そこにいた。昨日、車にはねられて亡くなつたはずの遠野くんが。

まるで信じられない光景に、私は呆然とする。

もう一度と会えないと思っていたその存在が、今、私の目の前にいる。

「え……遠野くん、どうしてここにいるの?」

わけがわからず、私は声を裏返させた。

もしかして幽霊? それともただの幻?

戸惑う私をまっすぐに見上げながら、彼はさらに思いもよらぬことを口にした。

「一ノ瀬こそ、なんでここにいるんだよ。昨日、事故で亡くなつたって聞いたけど……」

「え?」

私が死んだ、と彼は言う。

一体どういうこと?..

ますますわからなくて、私は目を白黒しらくろとさせる。

「え、えっと。私、死んでないよ？ 昨日事故で亡くなつたのは遠野くんで……だから、遠野くんはここにはいないはずなのに。どうして」

「いやいや。何言つてんだよ。昨日、事故に遭つたのは一ノ瀬の方だろ？」

お互いの認識が噛み合わなくて、私はもちろん、遠野くんも珍しく焦つている。

「お。なんか意外な組み合わせだな、遠野と一ノ瀬って」

「ほんとだ。いつのまに仲良くなつたんだ？」

教室の奥の方から、男子たちの茶化すちかような声が聞こえた。その発言からすると、彼らにも遠野くんの姿は見えているらしい。

ということは、今ここにいる遠野くんはやつぱり幽霊や幻の類たぐいではないということが、

そして、昨日の事故のことは私たち以外に誰も覚えていないように見える。

何がなんだかわからないまま、校内には予鈴よねいが鳴り響いた。

遠野くんに色々と聞きたいことはあるのだけれど、今は仕方なく、私は自分の席へ

戻ることにする。

騒がしかった教室が少しづつトーンダウンしていく、やがて担任の男性教師が入ってきて、挨拶の号令がかかる。そのギリギリのタイミングで、一人の男子生徒が教室内へと滑り込んできた。

向田悠生くんだった。爽やかなセンター分けの髪に、陽のオーラを常にまとつた人。そして昨日、遠野くんが事故に遭つたことをSNSで最初に報告した人物でもある。確か、事故の瞬間を目撃したとも書いてあつた。

彼ならもしかしたら、昨日の事故について何か知つていているかもしれない。後で、彼にも話を聞いてみよう。

先生との挨拶を終えた後は、出欠確認だつた。

名前が呼ばれるのは出席番号順。苗字が『一ノ瀬』の私は前から一番目。そして私の前にいる出席番号一番は、例の喧嘩中の友達だった。

「天江。天江ハルカ……は、体調不良で休みだつたな」

昨日の昼休みのことがあつて、私は彼女と顔を合わせるのが気まずかつたから、彼

女が今日は欠席であることにあつた意味ホツとした。とはいへ問題は何も解決していないので、先延ばしになつただけだけだ。

「先生」

と、そこへ一人の男子生徒が手を挙げた。

先生が返事をするよりも早く、彼はその場に立ち上がりて質問する。

「先生。ハルカは……天江は本当に、ただの体調不良なのか？」

どこか切羽詰まつた声でそう尋ねたのは、向田くんだった。

なんだか普段の彼らしくない様子に、私は違和感を覚える。

「どうした、向田。天江のことでのか聞いてるのか？」

「何かつて……」

彼は引きつった表情のまま教室中を見渡すと、これまたどんでもないことを言い出した。

「だつてハルカは……昨日、事故に遭つて死んだじゃないか！」

ざわり、と教室内がどよめき立つ。

私ももちろんびっくりして、思わず彼の顔を凝視する。

「どういうこと？」

「何それ聞いてないんだけど！」

「おい悠生。一体何言い出すんだよ!!」

周りのクラスメイトたちからは口々に戸惑いの声が上がる。

ハルカちゃんが事故に遭つた。向田くんはそう言つている。

けれど昨日の彼は、事故に遭つたのは遠野くんだと言つていたのに。

「天江が事故？ そんな連絡はなかつたぞ。今朝は体調不良だつて親御さんが言つたが」

先生は訝しげに向田くんを見つめている。

「悠生。お前、何寝ぼけてるんだよ。そういう夢でも見たのか？」

近くにいた男子が半笑いで言うと、向田くんは至極真剣な様子で「夢なんかじやない！」と反論する。

「オレは昨日、目の前で見たんだ。ハルカがトラックに轢かれて、すぐえ血が出てて、全然見え覚まさなくて、救急車で運ばれて……お前らだつて、昨日のニュース見てただろ!! ハルカが死んで、お悔やみのメッセージいっぱい書いてたじやんか！」

「はっ？ なんだよそれ」

彼のただならぬ様子に、周囲も困惑している。

向田くんとハルカちゃんは中学の頃から仲が良くて、今も同じ陸上部で活動している。だからお互いに冗談を言い合つたりするのはいつものことだつたけれど、さすがに今回のはじょーくとしては笑えない。

そして何より私が気になったのは、彼の口にした事故の状況が、まるで遠野くんの事故とそっくりだったことだ。

トラックに轢かれて、救急車で運ばれて、そのまま亡くなってしまったことがニュースで発表されて、SNS上ではクラスメイトたちからの追悼メッセージが溢れた。

そして今はなぜか、その一部始終をクラスメイトたちは覚えていない。
何か、説明のつかない現象が起きている。

思わず遠野くんの方を見てみると、彼もまた私の様子を窺っていたようで、お互いに目が合つた。

彼はそのまま、おもむろに椅子から立ち上がつたかと思うと、つかつかと向田くん

の方へ歩み寄つた。

「向田、ちょっと来い」

「は？」

有無を言わざぬ様子で、遠野くんは向田くんの腕を掴み、強引に廊下の方へと連れて行く。

「え。ちょ、おい。遠野。なんなんだよ急に！」

吠える向田くんには構わず、遠野くんは教室の扉の前まで来ると、「一ノ瀬も来い」と、私にも声をかけてくる。

「え、私……も？」

「当たり前だろ」

彼の迫力に押され、私も恐る恐る席を立つ。

「こら、お前たち。どこへ行くんだ。今は休み時間じゃないぞ！」

教壇から、先生の怒号が飛んでくる。

「授業が始ままるまでには戻るんで」

遠野くんはそう淡々と言つと、微塵みじんも悪びれることなく、私たちを連れて教室を後

にした。



誰もいない階段の踊り場で、私たち三人は神妙な顔を向け合っていた。開放された窓の外からはセミの声が聞こえてくる。ジワジワと肌から噴き出る汗は、暑さのせいなのか、それとも心理的要因のせいなのかはわからない。「なるほど。つまり……どういうことだ？」

向田くんが言った。

その感想はごもつともである。今私たちの間で起きている事象を把握しようとしたところで、わけがわからぬ、という結論に達するのだ。

遠野くんは私たち二人を交互に見て、難しい顔をしたまま口を開いた。

「向田は昨日、天江が事故に遭つたって言つてたよな。けれど俺の記憶では、昨日事故に遭つたのは一ノ瀬だった。そして一ノ瀬は、俺が事故に遭つたと言つている。つまり、全員が別々の記憶を持つてるってことだ」

「待て待て、意味がわからないぞ。じゃあ、昨日のあれはなんだったんだよ。オレは確かにこの目で、ハルカが事故に遭う瞬間を見たんだ」

ハルカちゃんが事故に遭つて、命を落とした。

想像しただけでも寒気のする話だった。

昨日、遠野くんが亡くなつたと聞いた時もショックだつたけれど、それがもしハルカちゃんだつたとしても、私の心は耐えられる気がしない。

「つて、ちょっと待てよ。じゃあハルカは今どうなつてるんだ？ 昨日の事故がなかつたことになつてるって言うなら、ハルカは無事だつことか!?」

「たぶん、そういうことになるんだろうな。先生も体調不良で休んでるだけだつて言つてたし」

「ちよ、オレ電話かけてみるわ！」

すぐさまスマホを取り出す向田くん。きっと彼も、昨日の事故のことなどでとても心を痛めていたのだろう。

さつそく電話をかける彼を横目に、遠野くんは私に耳打ちした。
「電話、一ノ瀬がかけなくて良かつたのか？ 天江と仲良いだろ？」

さすがは遠野くん。クラスメイトの交友関係もしっかりと把握しているらしい。

けれどそんな彼も、私が今ハルカちゃんから避けられている事実は知らないようだつた。

「う、うん。大丈夫。向田くんもハルカちゃんと仲良いし」

そう愛想笑いをする私を、遠野くんはじつと見つめてくる。

なんだか、心の奥まで見透かされているような気がして落ち着かない。

「あ、もしもし。ハルカか?!」

向田くんが声を上げた。

どうやら電話が繋がつたらしい。

三人で耳を澄ませてみると、スピーカーの向こうからは聞き慣れた高い声が届く。

「……え、悠生? その声、悠生なの?」

ずびつ、と涙をする音。

風邪気味なのか、あるいは泣いているような鼻声だつたけれど、その声は間違いなく、私たちのクラスメイトである天江ハルカちゃんのものだつた。

「ハ、ハルカ……なんだよ、無事だつたのかよ……」

心底ホッとしたように息を吐く向田くん。

しかしそれも束の間、ハルカちゃんの次の言葉で、再びその場に緊張が走つた。

「ど、どうなつてるの? だつて悠生、あんた昨日死んだはずじゃ……」

「は?」

向田くんが死んだ、と彼女は言う。

おそらくは昨日の事故で、というのは、もはや私たちの中で共通認識となつていた。

「オレが、死んだ? ……もしかしてハルカも、あの事故の瞬間を見たのか?」

「見てたし、昨日のあの瞬間、一緒にいたじやん! 二人で港の方まで行つた帰り、駅に向かつて歩いてたら急にトラックが突つ込んできて……!」

港の観光エリアのそばの、神戸駅付近での事故。やはり彼女が目にしたのもあの事故のようだつた。

私たち四人は、昨日のあの瞬間に、それぞれが別の人物の死亡事故を目撃している。ありえない話だつた。何かの間違いとしか思えない。

けれど、ただの思い違いにしては、あまりにも珍しい偶然が重なりすぎている。

「なあ」